

一人一人が未来の創り手となる豊かな学びの創造

— 小学校外国語活動における「問い」と「振り返り」の工夫を通して —

指導主事 深水 宏子
指導主事 太田 篤士

研究協力員 宇城市立豊野中学校 教諭 吉村 良子

1 はじめに

グローバル化の進展に伴い、多様な文化や価値観を持つ人々が共存・共生する社会が現実化する中で、外国語によるコミュニケーション能力は、生涯にわたる様々な場面で必要とされることが想定される。

本実践では、外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせながら、相手に配慮してコミュニケーションを図る体験をさせる。このことは、児童自身が豊かな人生や持続可能な社会の実現に向けて、多様な人との対話の中で主体的に他者と関わろうとする態度の育成につながるものであり、ひいては一人一人が未来の創り手となることに資するものであると考える。

2 研究の視点について

(1) 視点1『見方・考え方』に着目した問いの工夫について

新学習指導要領解説外国語編では、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」について、「外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること」と示されている。

このような見方・考え方を働かせるためには、コミュニケーションの目的を明確にした場面を設定し、他者によりよく伝えたり、相手の意図をより深く理解しようとして聞いたりする体験をさせることが有効だと考える。

本研究では、相手意識、目的意識の生まれる課題を設定するとともに、単元を通して外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせる言語活動を取り入れることとした。

(2) 視点2「学びを実感する振り返りの工夫」について

外国語活動における学びの実感とは、慣れ親しんだ英語の語句や表現を駆使したコミュニケーションを体験することで自己の成長に気付いたり、実際の

コミュニケーション場面と結び付けて学習したことの有用性を実感できたりすることと捉えた。そこで、学習活動において、教師が児童の学びのよさを価値付け、児童の意識化を図るとともに、実際の言語使用場面を想定した振り返りの場面を位置付けることとした。

3 研究の実際

検証授業 小学校第6学年

単元名 What do you want to watch?

オリンピック・パラリンピック

(1) 本単元の授業設計

本単元は、小学校新学習指導要領における第2章第10節第2の2内容(3)①言語活動に関する事項ア 聞くこと、イ 読むこと、エ 話すこと[発表]を受けて、オリンピックやパラリンピックで注目の競技や選手について伝えたいことを整理して発表することをねらいとしている。

今回、自分が観戦したい競技だけでなく、注目の選手の情報も加えて紹介するという課題を設定した。このことにより、既習の語彙や表現を駆使して伝える必然性が生まれる。また、伝える対象を学級の友達だけでなく中学生へと広げることで、相手に配慮しながらコミュニケーションを図る楽しさや大切さを実感させることをねらった。さらに、単元のゴールの達成に向けた一連の言語活動に系統性を持たせることで、単元を通して主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成できると考えた。

(2) 単元の目標

オリンピック・パラリンピックで観戦したい競技について伝え合ったり、注目の選手を紹介したりしてコミュニケーションを楽しむ。

(3) 単元計画

第1時 競技名の英語での言い方を知る。

第2時 観戦したい競技を尋ね合う表現に慣れ親しむ。

第3時 自分が観戦したい競技を尋ね合う。

第4時 パラリンピックで観戦したい競技をインタビューする。

第5時 第三者を紹介する表現に慣れ親しむ。

第6時 自分の注目選手について伝えたいことを整理して書く。

第7時 観戦したい競技と注目選手を発表し合う。

第8時 観戦したい競技と注目選手について中学生に発表し、やり取りを行う。

(4) 研究の視点

〔視点1〕

コミュニケーションの目的や場面、状況などに応じて適切な言語材料を選択し、他者に配慮しながら既習表現などを駆使してコミュニケーションを図る課題を設定する。

〔視点2〕

コミュニケーションの場面などを明確にしたうえで、「聞く」「話す」力を自己評価する場面を設定する。また、自己の学びの変容や到達度を記録し、学びの深まりを実感させる。

(5) 授業の実際

① 視点1についての取組

コミュニケーションの目的や場面を明確にした言語活動を行うため、単元終末のコミュニケーション活動を、「パラリンピックで観戦したい競技と注目選手を紹介する」とし、単元導入時に児童と共有した。また、パラリンピックの競技の中でも特に児童が興味ある種目を取り上げて発表し合うことで、よりコミュニケーションへの意欲を高めることができると考えた。そこで、本単元で取り扱う「Do you want to watch ~?」「What sport do you want to watch?」などの表現に慣れ親しませる活動を行った後、パラリンピックで観戦したい競技を事前に調査するために、実際にインタビューし合う活動を取り入れた。その際、実際の言語使用場面で、「Do you want to watch ~?」「What sport do you want to watch?」が活用できることを実感させるため、インタビューで使用する表現は自ら選択して尋ねさせた。

さらに、自分が観戦したい競技だけでなく注目選手の情報も伝えるという課題を設定した。課題達成のためには、これまでに慣れ親しんだ語彙や表現を活用しながら第三者について説明する段階的指導が

必要であると考えた。そこで、オリンピックの注目選手を題材に、クイズを出し合う活動を設定した。具体的には、「He is from Shimane.」など、注目選手について既習表現を用いて書かれた文章を5文程度準備し、クイズ形式で情報を伝えるという活動である。実際の活動では、出題する児童が、情報の順番を操作したり相手の理解を確かめたりと相手に配慮しながら伝える姿が見られた。また聞き手側も必要な情報を聞き返すなどして主体的にコミュニケーションを図る姿が見られた。



上記のような一連の言語活動を受けて、第7時では、これまでに学んだ既習表現などを活用してパラリンピックの観戦したい競技と注目選手を自作のポスターにまとめ、発表し合う活動を行った。前時に各グループで注目選手について伝える英文を書き、ポスターを制作した。その際、「それぞれの発表を聞き合い、『観戦したい』と思う競技を決める」というコミュニケーションの目的を事前に確認した。そのため、児童は、自分たちが紹介する競技に聞き手が興味を持ってもらえるようにと、より相手意識を持って伝える内容や伝え方などを工夫していた。

実際の言語活動では、伝え合うグループを交代しながら複数回の発表を体験させた。その際、中間評価などに



において、相手の話を聞いて適切なリアクションを返すことを意識させた。発表の回数を重ねるごとに、徐々に自信が高まり、自分たちの伝えたい内容がよりよく伝わるように表現方法などを工夫する様子も見られた。

単元最後には、中学生に向けて発表する活動を行った。伝える相手が変わることで、前回の発表の反省を基に情報をより分かりやすく伝えるためにポスターを改善したり、発表時には、具体物やジェスチャー

を取り入れたり、相手意識の高まりが見られた。さらに、児童の発表内容に関して中学生に英語で質問させたり反応を返させたりしたことにより、相手の発する英語を注意深く聞いて何とか相手の思いを理解しようとしたり、相手の反応に応じて試行錯誤しながら自分の思いや考えを英語で伝えようとしたりしていた。このような言語活動を通して、言語でコミュニケーションを図る楽しさや大切さを実感するとともに、児童のコミュニケーションへの意欲を高めることにもつながった。



② 視点2についての取組
単元終末のコミュニケーション活動において必要な語句に慣れ親しむ活動を行った際は、2時間に1回程度の割合で、新出語句をチェックリストで確認する時間を設定した。自己の理解度を記録に残す作業を継続的に行うことで、学びの深まりを自覚化させることをねらった。また、基本表現に慣れ親しむ活動を行った際は、これらの表現の実際の使用場面を視覚的に示しながら振り返りを行い、児童が身近な生活場面と結び付けて新出表現を理解できるようにした。



単元終末における発表では、教師による中間評価を行い、相手意識のある発表や返しを意識できているか振り返る場を持った。また、振り返りカードには、活動を通して「できるようになったこと」「気付いたこと」を自由記述で記録させ、学びのよさが表出された記述には、教師がコメントを返し、そのよさを児童自身が自覚できるようにした。記録を残すこと

で、児童は、前時までの学びを振り返り、次の活動に生かそうとする姿が多く見られた。

(6) 検証結果と考察
① 学習アンケートより
表1は、「豊かな学び」に関する変容について調査した質問紙調査の結果である。

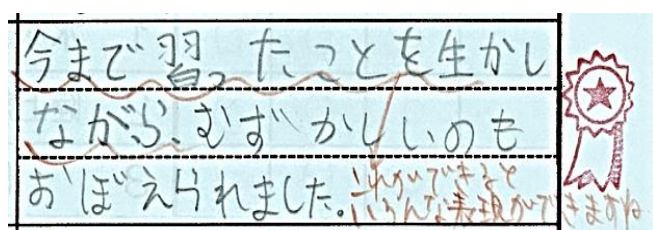
表1 「学習に関するアンケート」結果より抜粋 (n=25) 4件法
有意確率**<0.01 *<0.05

項目	質問	事前	事後	差
2	あなたは、外国語活動の授業で学んだことが、自分の将来につながると考えている。	3.32	3.72	0.40*
3	あなたは、外国語活動の学習で、どのように活動を行うのか、見通しを持って取り組んでいる。	3.20	3.42	0.22
11	あなたは、外国語活動の授業で、相手にどうしたらうまく伝わるかを考えながら学習に取り組んでいる。	3.32	3.64	0.32

今回の取組により、項目2において、有意な向上が見られた。また、検証授業後の児童対象質問紙調査の結果においても、「単元の学習を通してどんな力が身に付いたか」について、「英語で質問したり答えたりする力」「どういうときにどういう言葉を使うか」「英語で自分の気持ちを伝える力」など、主体的にコミュニケーションを図ろうとする自信や意欲の高まりがうかがえる回答が見られた。このことは、単元を通じて、既習表現を活用させる言語活動を設定したり、単元終末の発表においても既知の英語を駆使して伝える体験をさせたりしたこと、児童のコミュニケーションへの達成感や自信が高まったことによるものと考えられる。

項目3については、有意な向上は見られなかったものの、平均値が0.22ポイント上昇した。これは、単元導入時に単元のゴールを児童と共有し、1単位の時間の授業についてもゴールとのつながりを意識させる工夫を行ったためと考えられる。また、振り返りの場面において、新出語句の理解度を視覚化したり、新出表現の使用場面を明確にした振り返りを行ったことで、英語によるコミュニケーションにおける自己の課題が明確になり、児童自身がそのことを意識して授業に臨んだ結果であるとも考えられる。

項目11についても、有意な向上は見られなかったものの平均値が0.32ポイント上昇した。今回、単元終末の言語活動において、児童同士、または中学生との交流と、コミュニケーションの目的や状況が異な



る場面を設定した。このことにより、児童が伝える相手をより意識し、外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせる言語活動を体験できたからであると考えられる。

② 小中連携の視点から

今回の研究では、中学校英語担当教員の乗り入れ授業、及び児童生徒同士の交流授業を実施した。

表2は、「外国語学習」に関する変容について児童に調査した質問紙調査の結果である。

表2 「外国語学習に関するアンケート」結果より抜粋 (n=25)

4件法

有意確率**<0.01 *<0.05

項目	質問	事前	事後	差
う	あなたは、中学校での英語の授業が楽しんだ。	3.08	3.36	0.28

今回の実践により、児童の中学校英語学習への期待感は、検証授業前より0.28ポイント上昇した。

「中学校での英語の授業が楽しんだ」と回答した理由として、「中学生が感想や質問をしているのを見てすごいと思った。」「中学生が英語を話しているのを見て、あんな風になりたいと思った。」など、交流授業において、中学生が相手意識を持ってコミュニケーションを図る様子に刺激を受け、児童の中学校英語学習への期待がさらに高まったものと思われる。

さらに、検証授業後、「中学校英語教員による外国語活動の授業を受けて良かったこと」について自由記述で回答させた。その中で、「中学校では英語でどんなことをするのか分かった。」「中学校の(授業の)雰囲気を知ることができ、来年につながる。」などの記述が見られた。中学校英語教員の乗り入れ授業により、中学校英語学習の見通しが立ち、外国語学習への意欲の高まりに一定の効果があつたと考える。

4 研究のまとめ(成果と課題)

今回の研究による取組は、「豊かな学び」として一定の成果が見られたと考える。

今回、視点1の「見方・考え方」に着目した問いの工夫として、コミュニケーションの目的や場面、状況などを明確にした言語活動を設定した。児童は、それぞれの言語活動で、相手によりよく伝えるために試行錯誤しながらコミュニケーションを図っていた。特に、中学生に発表する活動では、伝えたい情報をより分かりやすく伝える必然性が生まれるため、児童

同士で同様の活動を行った際の反省点を生かして、ジェスチャーを付け加えたり具体物を示したりと、より相手意識のある発表を行っていた。

さらに、発表内容について、中学生から即興的な質問を受けることで、「どう答えるとよいか」を思考・判断し、何とか伝えようとする場面も見受けられた。また、中学生が、発表者に配慮したリアクションや質問をしたことで発表がしやすかったことを、多くの児童が感想に述べていた。

児童はこのような実際の言語使用場面に近いコミュニケーションを疑似体験することで、外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、他者に配慮しながら聞いたり話したりすることの大切さを認識するとともに、主体的にコミュニケーションを図ることができたと考える。

課題として、今後さらに「豊かな学び」に向かう授業改善に向けて、個々の児童の思いや考えを十分に生かした言語活動の実践が必要である。

今回の言語活動は、グループで活動することが主であったため、各児童が情報を自己選択・自己決定する幅を狭めてしまった。学級や児童の実態によっては、各自が一番紹介したい競技や選手を発表し合うことで、各自が外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせる言語活動が期待できる。

小学校高学年の外国語活動は、2020年度から外国語科となり、「聞くこと」「話すこと」について一定のスキルを求める授業が始まる。それは、自分の考えや気持ちを伝えることに留まらず、相手の話を聞いて簡単な質問をしたり、答えたりするスキルが求められる。今回の研究において実践した中学生との交流授業における児童生徒のやり取りが、小学校外国語科の言語活動の一事例となると考える。今後も引き続き小学校外国語科教育の趣旨やねらいを十分に踏まえた授業改善の方向性を探るとともに、「豊かな学び」の創造に向けた研究を進める。

《引用・参考文献》

- ・文部科学省(2008)「小学校学習指導要領解説 外国語活動編」
- ・文部科学省(2017)「小学校学習指導要領解説 外国語活動 外国語編」